

平成 29 年 5 月 22 日現在

機関番号：33703

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381047

研究課題名(和文)多言語多文化社会に生きる子ども達のドラマ活動の意義と可能性の研究

研究課題名(英文)The research on the meaning and the possibility of drama activities for children in multicultural multilingual society

研究代表者

松井 かおり (MATSUI, KAORI)

朝日大学・経営学部・准教授

研究者番号：70421237

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、海外にルーツがあり多様な文化的背景を持つ子ども達が日本人地域住民と協同して行うドラマ・プロジェクトを調査し、これらの子ども達の発達を支えるドラマ活動の意義と可能性について考察を行った。調査は、外国人集住地区で活動する可児市国際交流協会や、移民大国であるUKのロンドン大学や演劇ユニットと連帯して行われ、複数回のドラマ・ワークショップ、国際シンポジウムを実施して、ドラマ活動を支える環境づくりについても議論した。

研究成果の概要(英文)：This research was conducted longitudinally on the community-based theatre project performed by both foreign and Japanese residents to consider the meaning and possibility that it will encourage the development of linguistically and culturally diverse children. We also promoted several series' of workshops for the foreign children, together with the researcher at London university and the art directors in the UK, to discuss how we can create a drama environment within a multilingual and multicultural situation/context.

研究分野：外国語教育

キーワード：ドラマ活動 多言語多文化 子ども 自己表現 コミュニティ 社会文化的アプローチ

### 1. 研究開始当初の背景

現在、日本語教育を必要とする海外にルーツがある子ども達は年々増加し過去最高を記録している。文科省は、2016年現在、公立の小学校、中学校、高等学校、それに中等学校および特別支援学校に在籍する日本語指導が必要な児童生徒は、外国人籍の子ども達だけで29,198人であり、日本国籍の子どもを入れると、3万7千人を超えると報告している。彼らは、言語的にマイノリティであるだけでなく、文化的にもマイノリティであり、学習場面でも、他者との関係づくりや自身のアイデンティティの確立にも不安的な状況に置かれている。

### 2. 研究の目的

本研究は、海外にルーツがあり多様な文化的背景を持つ子ども達が日本人地域住民と協同して行うドラマ・プロジェクトを調査し、これらの子ども達の発達を支えるドラマ活動の意義と可能性について考察することを目的とする。本研究がいう文化的に多様な背景を持つ子どもとは、学齢期に親の移動に伴って来日し定住した子どもや、日本生まれであるが親世代が移民である2世の子どもをさす。90年代の入管法改正以来、そのような子ども達が急増し、外国人集住地区が日本各地に散在するが、まだ彼らへの教育の関心は学校を中心とした日本語教育が中心であり、学校や社会への不適応など多くの課題に対応できていない。本研究は、文化的に多様な子ども達の学習発達をドラマ活動を通して継続的に支援する取組みを観察分析することにより、多文化多言語社会における新しい教育方法について考える。

### 3. 研究の方法

(1)海外にルーツがある子ども達が参加する市民協同劇の観察と、劇の前後で行った子ども達とその保護者、制作関係者、学校教育関係者へのインタビューを通して、子ども達と協同劇の参加者たちとの関係性、子ども達の学校内外での学習・生活態度、友人やコミュニティ住民との繋がり方が劇の参加によってどのように変容をしたのかを調査した。調査にあたって、各々の子ども達に対しては、母語に翻訳した質問紙を使っての聞き取りや、通訳者を介しての面接などを必要に応じて行った。また焦点児童の授業参観や家庭訪問を行い、子ども達の学校と家庭生活、地域社会との接触状況の理解を深めた。

(2)過去に市民協同劇に参加した子ども達やその家族および日本人参加者へのインタビュー、アーティストや制作関係者、視聴者への聞き取り調査を行い、観察対象地区における市民協同劇の立ち上がりの経緯や変遷を記録した。その記録は演劇台本や舞台写真とともに編集され、地域コミュニティと演劇活動の相互育成的な関係の理解に役立つ

た。

(3)移民大国であり、難民、移民の子ども達などマイノリティに対して様々な教育的ワークショップを行っている英国の実践を調査した。2015年にはロンドン大学クイーンメアリー校と提携し、継続的なワークショップ活動の実績をもつ劇団 Phakama の芸術監督を、2016年にはオールド・ヴィック劇場の教育部門の責任者をそれぞれ招聘した。彼らの活動理念とその手法を応用して、日本に住む海外にルーツを持つ子ども達と日本人学生を対象にしたドラマワークショッププログラムを作成し、実施した。また、ロンドン大学クイーンズメアリー校のキーヴァ・マカヴィンシー博士は、英国の応用演劇の研究家であり、ドラマ活動がマイノリティや地域社会の問題にどのような介入を果たすのかを様々な場面で観察し提言を行ってきたが、Phakama と我々が協同で行ったドラマワークショッププログラムについて、キーヴァ博士から子細な観察に基づく支援のコメントを得た。また2015年に開催した国際シンポジウムでは、英国のワークショップ事例の紹介を受け、日英の状況の比較と各々の課題が議論された。

### 4. 研究成果

(1)2014年度は、観察対象地域で行われた市民協同劇であるドラマ・プロジェクトの参与観察と聞き取り調査の結果から、観察対象地域で行われたドラマ活動の開始から公演までの参与観察と聞き取り調査を通じて以下3種類のデータを得た。

1)海外にルーツがある子ども参加者の学習・生活環境(焦点児童の学校参観・家庭訪問調査による教師、家族への聞き取り調査を含む)について、観察地域の海外にルーツがある子ども達は、同じエスニック内の特定の人物のみと過ごす時間が長い傾向にあり、ドラマ・プロジェクトに参加することによって、他のエスニックグループの人間と接する機会を得ていること、また家庭内での保護者との会話が増えるなど彼らの生活環境が変化することが明らかとなった。さらに焦点児童については、プロジェクト参加後、学校で教師やクラスメートと積極的に話をする機会が増えたと担任教師が報告しているように、短期間での学習生活態度の変化が観察された。

2)海外プロジェクト内で実施された3種類のアート活動と参加者間のコミュニケーションと頻度の関係については、最初に行われた工作活動、それに続く影絵活動の2つの活動について、各エスニックグループ間の子ども達のやりとりを媒介するのは主に日本人の成人参加者であることが明らかとなった。お話しづくり活動においては、日本人成人参加者の媒介がなくても子ども達同士でのやりとりが観察されたことから、先行して行わ

れた2つ活動によって参加者同士の関係が構築されたと思われる。

3)過去のプロジェクトへの経験者や制作者たちへのインタビューから、ドラマ制作過程のエピソードについて語りを得た。

(2)2015年度は、移民の子どもやその家族などマイノリティーに対するワークショップ活動を展開しているロンドンの劇団Phakamaから、芸術監督とファシリテーターを招聘し、演劇ワークショップとその発表会を朝日大学で実施した。さらにPhakamaと連帯してその活動を調査しているロンドン大学クィーンメアリー校の演劇学部からCaoimhe McAvinchey博士を招聘し、国際シンポジウムを開催した。「現実を演じる—パフォーマンスとコミュニティ」と題した講演会と、PhakamaのCorinne Micallef氏による劇団の活動紹介が行われた。英国では、劇場に教育部門の設置が義務付けられており、そこでは青少年の芸術活動を支援するだけでなく、地域の課題(言語・文化、ジェネレーション、ジェンダーの差異や貧困などに起因する)に対し、様々な形のドラマワークショップで切りこんでいく試みが盛んであることが説明され、具体的な事例紹介を受けた。コミュニティに変革を促す条件、活動の即興性と創造性について議論がなされた。

Phakamaプロジェクトと名付けられたワークショップでは、岐阜県可児市の海外にルーツを持つ10代後半の子ども達と大学生、留学生が合同で行ったワークショップをモチーフにして、ひとつの作品を創り上げた。その創作過程には、日本人演出家や市民サポーター、事前にワークショップ講座を体験した大学生が加わった。「学習意欲が戻ってきた」、「ほんの数日の間に、半年間顔を合わせるだけの子が一緒に笑える友達になった」など子ども達の心理的变化とともに、大学生や留学生のコミュニケーション観・言語観の変化が著しく、それは後日外部講師を招いて行われた振り返り会(記録ビデオ上映会)でも話し合われた。

(3)2016年度には、27年度に実施した演劇ワークショップについて、活動初期からことばを導入する移行期の段階で、どのような活動が参加者のコミュニケーションを引き出し、コミュニティとしての発達を促したのかを国内外で2件発表を行った。

またロンドンのオールド・ヴィック劇場から教育部門の監督、Sharon Kanolik氏と脚本家でファシリテーターのStewart Melton氏を招聘して、岐阜県可児市の海外にルーツを持つ10代後半の子ども達と大学生、留学生が合宿形式で行うドラマ・ワークショップを可児市で行った。

昨年度から引き続き参加した大学生、留学生は特に自らの英語学習方法や、異文化理解の概念が刷新されたとコメントしている。具体的には、コミュニケーション場面での複言語使用の有用性や、完全な相互理解がなくともコミュニケーションは継続することの意味をふりかえる意見が多くあった。またワークショップの観察過程からは、他者の行為を模倣しながら改編をしていく協同的な創作活動や、「自分たちのことば」を共有する行為がみられた。

<引用文献>

文部科学省 HP「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成26年度)の結果について」

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/27/04/1357044.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357044.htm) 2017年5月1日アクセス

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

松井かおり(2016)「多文化・多言語社会を生きる子ども達のドラマ活動の意義と可能性:海外にルーツがある子ども達の「居場所」としての市民共同劇の役割に焦点をあてて」『片平』51号, pp.75-102. (査読有)

松井かおり(2016)「身体でまなぶ漢字 - 外国人の子ども達と外国人住民に対する漢字ワークショップから -」朝日大学一般教育研究協議会,『一般教育紀要』第40号, pp.53-64. (査読有)

松井かおり(2017) Consideration for the Meaning of Drama Activity in EFL Classes 英語授業におけるドラマ活動の意味」朝日大学一般教育研究協議会,『一般教育紀要』第41号, pp.45-52. (査読有)

松井かおり(2017)「異文化を背景に持つ子ども達の社会的相互行為過程としてのEmail交換:仲介人に焦点をあてて」『片平』52号, pp85-100. (査読無し)

[学会発表](計3件)

松井かおり(2015)「多言語・多文化共生社会における『ドキュメンタリー演劇』の意義と可能性 - 参加者のセルフナラティブに焦点をあてて -」第9回多文化社会実践研究・全国フォーラム(東京都府中市)

松井かおり(2016)「英語教育における学習者像再考 - 多言語・多文化の演劇ワークショップの事例から -」第42回全国英語教育学会埼玉大会(埼玉県草加市)

Matsui, K, Yamada, H. (2016) How the Play Constructs the Community in the Multicultural and Multilingual Situation? *Performing the World* 2016 (アメリカ合衆国, NY市)

各務眞弓(KAKUMU Mayumi)  
可児市国際交流協会事務局長

山田久子 (YAMADA Hisako)  
多国籍演劇ユニット MICHII 代表

MURAKAMI Vanessa Cristiny  
可児市国際交流協会ひよこクラス講師

〔図書〕(計 2 件)

松井かおり(2014) 『『教えない授業』で学生はどのように学ぶのか』山岡俊比古先生追悼論文集編集委員会(編),開隆堂, 『第二言語習得研究と英語教育の実践研究』, pp. 261-274.

松井かおり, 田室寿見子(2017) 『「ドキュメンタリー演劇」の挑戦 多文化・多言語社会を生きるひとたちのライフヒストリー』成文堂 293.

〔その他〕(計 3 件)

松井かおり(2014) 「異文化理解教育再考 - 小学校英語活動と市民共同劇の比較から - 」 『第 40 回全国英語教育学会徳島大会発表予稿集』, pp.398-399.

松井かおり(2014) 「経営ジャーナル：海外にルーツを持つ子ども達の教育」 『フォーラム』 Vol.51 秋号, p.8.

茂呂雄二, 佐々木英子, 太田礼穂, 陳晶晶, 伊藤崇, 石田喜美, 松井かおり, 山口(中上)悦子, 城間祥子, 新原将義, 広瀬拓海, 北本遼太, 有元典文, 岡部大介, 香川秀太, 若林庸夫, 森下奈美子, 郡司菜津美 (2016) 『インプロをすべての教室へ：学びを革新する即興ゲームガイド』新曜社 210.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松井 かおり(MATSUI, Kaori)  
朝日大学・経営学部・准教授  
研究者番号：70421237

(2) 研究分担者

今井 裕之 (IMAI, Hiroyuki)  
関西大学・外国語学部・教授  
研究者番号：80247759

吉田 達弘 (YOSHIDA, Tatsuhiko)  
兵庫教育大学学校教育研究科・教授  
研究者番号：10240293

(2) 研究協力者

Caoimhe McAvinchey  
Reader, London University

田室 寿見子(TAMURO Sumiko)  
Sin Titulo 主宰

